



歯舞群島の様子
歯舞群島の総面積は、北方領土全体の2%である。歯舞群島は数々の島から形成されており、水晶島(すいしょうとう)、秋勇留島(あきゆうりゅうとう)、勇留島(ゆうりゅうとう)、志免島(しめんとう)、多楽島(たらくとう)などが存在する。

歯舞群島の産業
漁業の経営形態は、歯舞群島においてはその生産の大部分はこらぶである。土着住民と開墾本村及び開墾住民の独自の採取にかかり、製品はほとんど根室に集約されていた。

多楽島の漁業

	昭和14年	昭和15年	昭和16年
魚獲小計	41,000	17,000	122,000
魚獲小計	220,000	1,620,000	11,000
魚獲小計	7,404,000	10,567,000	6,848,000
産	7,695,000	11,624,000	7,281,000
産額小計	37,956,000	45,040,000	25,349,000

多楽島では昆布以外に、鮭、鱈、カニの生産があり、樫木・中棟(なかしん)の2箇所に出産工場が存在した。

カガマ港
カガマ港は、10tクラスの船舶を20隻収容することができ、根室、歯舞への連絡港として、古別港と共に利用されていた。

色丹島



斜古丹港湾
斜古丹港は天然の良湾形で、小型船舶の停泊は極めて安全に行うことができ、2,000tクラスの船舶6～7隻の収容することが可能であった。色丹島への物資の集積地であり、根室近海および函館汽船競争航路の寄港地でもあった。

色丹島の海苔漁業
漁業者1戸あたり、平均1,000枚が生産されていた千島海苔は、97センチ×48.5センチの最大サイズに達したもので、海苔漁業は色丹島の漁業者(145戸)の生活に安定をもたらしていた。

色丹島の鱈漁業
色丹島の漁業の大半は鱈漁業であった。同島の水揚げの過半数を占めており、そのほとんどが製品化され、品質も高い評価を受けていた。

色丹島の様子
色丹島の地形は、北方領土全体の5%である。島全体が、緑に覆われた丘陵が連なる高山植物地帯である。太平洋側の海岸は複雑に入り組んでおり、断崖絶壁が多い。

色丹島の産業
鱈漁業は、歯舞群島全体の過半数を占める水揚げを誇り、船が製品化されたその品質は高く評価された。また、島全体の漁業を生活に安定をもたらしていた海苔漁業は、千島の約半、一戸平均1,000枚は獲りに生産されていた。

イネモリ港
漁業や陸揚船の運搬の基地として利用されていたイネモリ港は、水深10m、2,000tクラスの船舶5～7隻は収容可能であった。

古別港
古別港は、水深が7～10mあり、10tクラスの船舶を30隻収容することができ、根室や歯舞への連絡港として、カガマ港と共に利用されていた。

志免島の漁業経営
志免島の漁業は昆布、蟹、海老、帆立などの生産があり、出産工場が二棟存在した。

歯舞群島

北方領土 Facts&Figures

- 【主な引用文献】**
- われらの北方領土2015年版
 - 沖縄・北方対策庁『北方地域総合実態調査書(国後島の部)』(1970年)
 - 沖縄・北方対策庁『北方地域総合実態調査書(択捉島の部)』(1971年)
 - 沖縄・北方対策庁『北方地域総合実態調査書(歯舞群島の部)』(1970年)
 - 沖縄・北方対策庁『北方地域総合実態調査書(色丹島の部)』(1970年)
 - 北海道総務部『戦前における歯舞・色丹・国後・択捉諸島の概況』
 - 北海道『千島調査書』(1956年)

- 領土復帰北方漁業対策本部『色丹島及び歯舞諸島調査書』(1956年)
- 歯舞漁業協同組合特別企画室『終戦前に於ける歯舞諸島沿岸漁業調査資料』(1956年)
- 日本捕鯨協会 『1941年以降沿岸捕鯨統計』(1954年)
- 北方領土文化日露共同学術交流実行委員会『北方領土の神社』(2005年)
- 南方同胞援護会編『北方地域資源調査書(昭和36年3月)』(1961年)
- 田中薫・大野英三『色丹島概説』(1940年)
- 北海道農事試験場根室支場調『千島調査書』(1935年)

衛星画像 ©Geoscience, NTT DATA, RESTEC / Included©JAXA